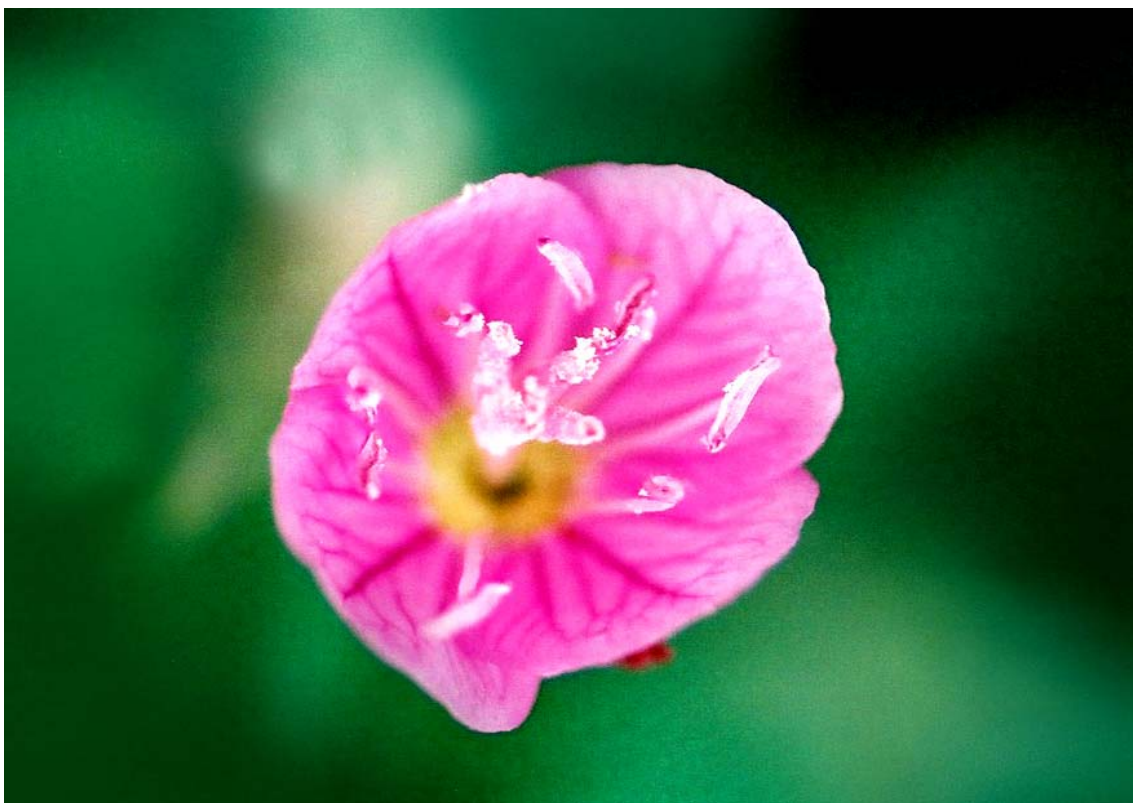


## 18) ユウゲシヨウとハンゲシヨウ＝夕化粧と半化粧（半夏生）

ユウゲシヨウはアカバナ科の多年草で、南アメリカの原産、幕末から明治の初めごろに観賞用としてアメリカから移入された。高さは30～50cm、茎には短い白色の毛が多い。根生葉は倒皮針形もしくはへら形で、しばしば羽状に深裂する。茎上の葉は皮針形もしくは長楕円形で、縁には波状の浅い鋸歯があり、葉面も波を打つ。5月下旬から9月ごろにかけて葉腋に径1～1.5cmで淡い紅色の4弁花を1輪ずつ咲かせ、花弁には紅色の脈が目立つ。和名の由来は朝から夕刻にかけて花を開くためである。しかしマツヨイグサなどとは異なり、夕刻から花を開くことはない。別称としてはアカバナユウゲシヨウである。学名は『*Oenothera rosea*』で、属名は「oinos＝酒」と「ther＝野獣」との合成語で、根にぶどう酒のような香気があり、この香を野獣が好むためである。種小辞はバラのようなという意味で、淡紅色の花の色を表している。ユウゲシヨウは明治に帰化した頃には盛んに栽培されたこともあったが、今ではほとんど庭園などでは見ることができない。花が小さいために、庭園花としては物足りなさがあったのだろう。しかし野草として熊本県、福岡県などの九州地方や、兵庫県、静岡県、また関東では千葉県、埼玉県などでよく目にすることができる。アレチノギクやマツヨイグサなど、他の帰化植物の現状ともよく似ている。

一方、ハンゲシヨウはドクダミ科の多年草で、本州の静岡県以西、四国、九州、沖縄の湿地に自生するほか、東アジアに広く分布する。高さは1mほどになり、全体に臭気がある。6～8月ごろの花期になると、茎頂のハート形の葉が数枚、その半分ぐらいが白く変色し、淡黄色の花穂をたれ下げる。葉が白くなる理由はハンゲシヨウが虫媒花で、虫を引き寄せるためとも言われているが、花期に葉色に変化するのにはマタタビ(07-03-06)やポインセチア(07-02-05)なども同様で、虫にそこまでの色別判断能力があるのか疑問も残る。単なる婚姻色とか生殖標の植物版とも取れなくもない。和名の由来は夏至から数えて11日目、7月2日ごろに花を開き、この時期が暦上の『半夏生』に当たるためとも、開花期に半分だけ葉が白くなるさまが、半分だけ化粧したようだからとも言われている。別称としては葉の半分が白くなることからカタシログサ、3枚の葉が白くなるという意味でミツシログサ、白くなった葉が白粉をかけたような姿であることから、オシロイカケ、臭気がドクダミに似ており、白粉をかけたような葉であることからシロドクダミなどとも呼ばれている。学名は『*Saururus chinensis*』で、属名は「トカゲ＝sauros」と「尾＝oura」との合成語で、垂れ下がった花穂をトカゲの尻尾に見立てたもので、種小辞は「中国の」という意味である。イギリスでは「lizard's-tail」で、lizardはトカゲ、またはイモリという意味。中国では「三白草」である。

ハンゲシヨウは観賞用として庭に植えられるほか、茎や葉は浮腫みをとる効果があるとされ、煎じて利尿、腫れ物などの治療にも用いられた。なお『半夏』という名の生薬があって、これはカラスビシヤクからとる漢方薬で本種とは別物である。



薄紅の花がどこか色気を感じさせる夕化粧の花。この花を見るたび夕化粧という命名の巧みさに感動させられる。なぜか故郷を離れて異国の地に咲く悲哀がにじんできているように見える。



夕化粧の花は、花径1.5cmほどの小さな花である(上の写真ともさいたま市大宮区)。



群落を作って咲き競う夕化粧の花だが、朝方から夕刻まで咲いている(さいたま市大宮区)。



ユウゲシヨウと呼ばれるもう一つの花に、このオシロイバナがある。学名は『*Mirabilis jalapa*』で、葉の汁は疥癬の薬でもある。ペルー原産で『花譜』にはその名が見える。その昔、胚乳の粉を白粉として用いたらしい。夕刻から翌朝に花を開くためユウゲシヨウとも言う(さいたま市緑区)。



白くなったハンゲショウの葉の裏側は緑色である(東京都小平市薬用植物園)。 [目次に戻る](#)